



第 49 号
平成28年12月1日 発行
発行
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病院長
坂本 裕彦

基本“唯惜命”
理念

私たちは生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。



埼玉県のマスコット コバトン

目次

- 病理診断科の紹介..... 1
- リレーフォーライフジャパン2016 in さいたま 参加報告..... 2
- 緩和ケア病棟 病棟紹介..... 3
- 高校生対象のサマースクールを開催..... 4

病理診断科の紹介

病理診断科科长兼部長 黒住昌史

はじめに

埼玉県立がんセンターの病理診断科について紹介します。病理診断科では、現在 5 名の常勤病理医で診断を行っています。メンバーの全ては悪性腫瘍全般の病理診断を専門にしていますが、更に各々が水準の高い専門領域を持っています。また、診断業務に加えて、各臨床科の医師、コメディカル、研究所の研究者との共同研究を行っており、数多くの学会、論文発表を行っています。以下に私たち病理医の行っている業務について紹介したいと思います。



1 病理医とは？

がん専門病院の病理医は「がん」の最終診断になる病理診断を行っています。患者さんと接する機会がほとんどないために、病理医は一般の方にはあまり知られていません。しかし、「がん」領域で病理診断が重要視されるようになってからは、徐々に認知されるようになってきました。病理医の主な仕事は「細胞診」、「生検標本の組織診断」、「手術標本の組織診断」、「術中迅速診断」、「コンパニオン診断」です。また、現在は非常に少なくなりましたが、「病理解剖」も行っています。

2 病理医の仕事の内容

(1) 細胞診 細胞診は病変から採取した少量の細胞を顕微鏡で観察することによって病変の推定診断を行うことです。病変組織から離脱した少量の細胞しか見ないため、確定診断にはなりません。細胞は穿刺吸引や擦過で採取したり、尿、喀痰、腹水から集めたりします。細胞診は細胞検査士の資格をもつ臨床検査技師と共同で行っています。

(2) 生検標本の組織診断 生検とは内視鏡、針生検、小手術などで病変の一部を採取する方法であって、採取した少量の組織を顕微鏡で観察することによって病気の最終診断を行うことができます。根治手術、抗がん剤治療、放射線治療を行うためには生検標本による「がん」の確定診断が必要であり、組織診断の結果を担保に「がん」の治療が行われています。

ん」の確定診断が必要であり、組織診断の結果を担保に「がん」の治療が行われています。

(3) 手術標本の組織診断 手術によって切除された病変全体を含む臓器や組織について組織診断を行います。これによって全体的な組織診断、組織型診断、分化度、広がりや深達度の評価、断端診断、リンパ節の転移診断などを行います。

(4) 術中迅速診断 手術中に組織診断や細胞診を短時間で行うことを術中迅速診断と言います。組織を急速に凍結して作製した凍結切片で診断します。精度はかなり落ちますが、大体の診断は可能です。断端の診断、転移の診断などが行われます。常勤病理医がいる病院でできる検査です。

(5) コンパニオン診断 特定の抗がん剤が効くか効かないかを推定する診断をコンパニオン診断と言います。乳癌でのホルモン療法剤の適応を決めるエストロゲン受容体、プロゲステロン受容体、HER2 標的治療薬の適応を決める HER2 検査、ALK 阻害剤の適応を決める ALK 検査などを病理診断科で行っています。

(6) 病理解剖 不幸にして病院で亡くなられた患者さんを解剖させて頂き、死因、病態、治療効果などを検証しています。



3 病理診断数

平成 27 年度の細胞診数は 9,702 件、生検標本診断数は 6,634 件、手術標本診断数は 2,740 件、術中迅速組織診断数は 841 件、術中迅速細胞診数は 773 件、解剖数は 1 件でした。

4 日本の病理医不足

平成 26 年度の日本全国の病理診断数は 376 万件です。平成 16 年度と比較すると 1.75 に増加しています。また、術中迅速診断数は 10 年間で 3 倍の約 17 万件になっています。ところが、日本全国の病理専門医数は平成 27 年にわずか 2,258 人しかいませんし、5 年以内にそのうち約 500 人が 65 歳以上になることが予測されています。病理医不足が深刻な問題になっています。

おわりに

私たち病理医は、当院を受診して下さった患者さん方に可能な限り早く正しい診断を提供すべく頑張っておりますので、何卒、応援して頂くようお願い申し上げます。



リレーフォーライフジャパン 2016 in さいたま

参加報告

埼玉県立がんセンター副病院長

リレーフォーライフジャパン2016 in さいたま実行委員会副委員長 横田 治重

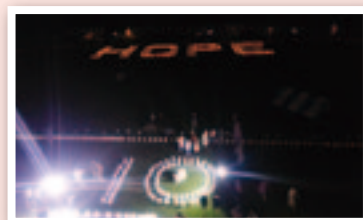


副病院長
横田 治重

日本での開催10周年を迎えたがん患者支援イベントリレーフォーライフであるが、さいたま市での開催も8年目となり、9月10日(土)～11日(日)にさいたま市緑区農業者トレーニングセンター緑の広

場で開催された。例年のようにがんセンターはこのイベントを後援して各種啓発イベントを開催すると同時に、チームとしても参加した。今年のチーム編成は、伊藤看護部副部長をリーダーとするがんセンター本体チームに加え、相談支援センターの一部スタッフは埼玉県がん診療拠点病院協議会の相談支援作業部会チームに加わり参加、さらに昨年初参加した検査臨床検査技士会チームは今年もがんセンターの岩田検査部部長の号令のもとがんセンターの隣のテントで参加し、1チームのようでもあり2あるいは3チームでもあるような不思議な体制であった。啓発テントでのイベントとしては、坂本病院長ががん検診について、川村血液内科医長がAYA(思春期/若年成人)世代のがんについて講演し、ステージではがんセンター有志が恒例の“一発芸”的な唄！を披露し、夕方にはNPO“がんと暮らしを考える会”の講演を受けてのステージ上でのトークに、地域連携相談支援センターの池田主任MSWと相談支援センター長の

横田がサバイバーの方と共に登壇して意見を交わした。またがんセンターチームテントでは今年も乳



がん自己検診体験や無料がん相談が行われ、リフレクソロジーのボランティアの方の手技にうっとりとし眠りに落ちる体験もできた。一方リレーウオークでのがんセンターチームは24時間でトラックを400周以上(推定100km！)(時に走り)歩き通した。

以上がリレーウオークイベントでのがんセンタースタッフの活動報告であるが、実はイベント当日に向けてがんセンター外来のホスピタルストリート玄関寄りでは、数週間にわたりオペ室鈴木師長を中心とする有志によりサバイバー(患者さん)やケアギバー(家族/遺族/医療スタッフ)の気持ちを伝えるルミナリエバッグ記入のプロモーションが行われ、入院中の方や通りかかった方から沢山の参加をいただいた。またセミナー室を使つての広報活動も行った。ルミナリエバッグはリレーウオーク当日には全部で700以上も集まり、夕方点灯されてから夜のあいだ中記入者のメッセージを参加者に伝えていた。

来年はさらに多くの患者さん・ご家族やがんセンタースタッフが参加してこのイベントがさらに成長することを期待してやまない。



緩和ケア病棟 病棟紹介

緩和ケア病棟師長 下永吉 麻里

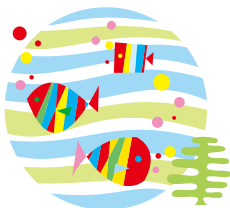


緩和ケア病棟師長
下永吉 麻里

緩和ケア病棟は、がんによる様々な苦痛を緩和して、よりよく生きていくことを支える目的で、平成10年に18床でオープンしました。新病院では患者さんの療養環境の向上を図るため

に、多くの患者さんやご家族のご意見を取り入れ、全室個室36床の病棟に生まれ変わりました。

緩和ケア病棟は、がんセンター最上階の10階にあります。患者さんやご家族が心豊かな生活を送るための療養環境についてご紹介します。談話室には、熱帯魚を鑑賞できる大きな水槽、コーヒー等のお茶をサービスするカウンターバー、そしてテーブルとイスが並び、森の中のカフェにいたような雰囲気が感じられます。毎月、ピアノとバイオリンやマリンバなどのコンサートが開かれ、ボランティアの方々が入れて下さるコーヒー



やお茶を飲みながら、演奏に耳を傾け、心癒される時間を過ごすことができます。談話室に続くデッキテラスは、広々としており、自然の風や光を肌を感じながら、四季折々の植物や花を楽しむことができます。また、病室には「トイレは自分の力でしたい」という多くの患者さんの希望を叶えるために、ベッドをトイレの近くまで寄せられる工夫があります。そして便座は、立ち上がりがしやすいように昇降式になっています。入院生活で筋力が落ちないように、リハビリも受けられます。音楽ケア室には、カラオケとピアノがあります。防音室になっているので、他人を気にせずに音楽を楽しむことができます。

緩和ケア病棟は、病気を抱える患者さんやそのご家族が体験する様々な身体や心のつらさを和らげ、自分らしさを取り戻し、より豊かな生活が送れるように支えていく病棟です。一人一人の患者さんの希望を実現するために医師、看護師、薬剤師、栄養士、作業療法士、ボランティアなどさまざまな専門家が協働しています。



もしかしたら、「最後を迎えるところだ」と思っている方はいませんか？病氣と向き合い、つらいとき、苦しいときに自分らしさを取り戻すことができる場所、それが緩和ケア病棟です。



高校生対象のサマースクールを開催



臨床腫瘍研究所 主任研究員 生田 統悟



臨床腫瘍研究所
主任研究員
生田 統悟

臨床腫瘍研究所では、8月20日（土）に「ひらめき☆ときめきサイエンス がん研究入門～がん細胞の遺伝子解析実習」を、日本学術振興会の支援を受けて開催しました。

これは、生命科学に対する興味を深めてもらうことを目的とし、医学・生物学に興味がある高校生20名を対象として、がん細胞を使った実験操作を体験してもらうものです。保護者の方と、高校の理科の先生も見学に参加しました。

朝の9時に臨床腫瘍研究所に集合し、がん細胞や遺伝子についての講義のあと、4人ずつ5つの班に別れて、それぞれの研究室へ移動します。この日の実験の目的は、「EGFRという遺伝子の変異を検出する」というものです。EGFRは、細胞が増殖するために必要な遺伝子です。この遺伝子のある特定の場所に変異のある肺がん細胞では、ある種のがん治療薬が効きやすいことがわかっています。そこで、実験材料はシャーレの中に培養されている肺がん細胞です。まずは顕微鏡で細胞の様子を観察してもらいました。

実験では、1ミリリットルの1000分の1というわずかな量の溶液を扱います。そのための特殊なピペットを操作して、細胞の中にある遺伝子を抽出し、その量を測ります。十分量取れている人もいれば、どこでなくしちゃったかなあ…という人もいます。それでも、



みなさん初めての研究室に初めての機械ばかりのはずなのに、楽しそうにやっていました。さらに微量の溶液を混ぜ合わせ、目的の遺伝子を増幅するためのPCRの反応液を各自で調整しました。

昼食後はPCR反応が終わるまで、高校生に職員も合流しての懇親会です。進路のことや日常考えていることなど、あちこちから飛び出す高校生のオーラで、いつもは静かなカンファレンスルームが別の空間にみえました。最後に今日の結果をまとめて、班ごとの発表会をおこないました。こちらから見てみると、なんでそうなるの??という結果が続出でしたが、彼らの度胸のよさは見習うべきかとも思いました。



朝から夕方までぎっしりのスケジュールでしたが、概ね楽しんでもらえたようです。高校生からは、「初めての経験でおどろきがたくさんあった」、「自分の手で結果を出すのが楽しい」、「事前学習のための情報がほしかった」などの感想・意見が寄せられました。次年度の計画に生かしたいと思います。参加してくれた生徒が、生命科学への興味をますます深め、自ら勉強してこの分野をさらに拓いてくれることを期待しています。

